

本学創立10周年記念号によせる言葉

本学は創立以来、人文、理学及び家政学、農学の3部門にわけて、学術報告を毎年ひき続いて発刊してきた。今年は本学の創立10周年にあたるので、諸種の記念事業の一つとして学術報告記念号の刊行を企てた。そのうち、理学及び家政学部門の研究成果の1部を集録して記念号としたものが本号である。

学術の研究は大学に課してある使命の一つであつて、その成果の公表は大学がはたさねばならぬ責務の一つである。この責務を、はたさねばならぬという考えかたからだけではなく、本大学人は本学設立の目的と主意にかんがみて、一面においては、清純で教養ゆたかな男女人材の育成にむかって力をそそいでいると同時に、他の一面においては、各自の専門分野における学術の研究にむかって^{はげ}励みを続けている。

その成果として、我が国および欧米の諸学会誌にのせて学術の進歩に寄与した多数の研究報文のほかに、力作としての著書の数も少なくない。そのうちには海外にて高い評価を受けているものもある。これとは別に、本学発刊の学術報告に登載した論著・報文のみでも、人文部門にありては97篇（内・欧文5篇）、理学及び家政学部門にありては157篇（内・欧文28篇）、農学部門にありては192篇（内・欧文38篇）に達している。

これらはいずれも本大学人の精進・努力の積みかさねである。研究への施設は貧弱であり、研究への諸経費は窮乏していたにもかかわらず、よくもこれだけの成果をあげ得たことであると思う。これは全く旺盛な研究意欲のあらわれであり、また、よき伝統を本学に樹立しようと志す愛学心のあらわれにほかならないであろう。それにつけても、施設と諸経費が、せめて University level に近づいているなら、本学の業績はもっとあがり、学的光彩は本学の学風をすでに特徴づけていたであろうことを思えば、ただ嘆息が残るだけである。

さりながら、「天国は一粒の芥種のごとし、人これを取りて、その畑に播くときは、^{よろず たね}萬の種よりも ^{ちいさい}小 けれど、^{そだ}育ちては、^{ほか}他の野菜よりも ^{おおき}大きく、^き樹となりて ^{そら}空の鳥きたり、^{やど}その枝に宿るほどなり」という聖節がある。この言葉はわれらを^{はげ}励まし、また、われ

らに希望をあたえる。心して^{ひら}拓いて^{つちか}培えば^{よくち}荒野も沃地となるのである。心を^{あわ}協せて忍耐よく、誠実・精励をつくすならば、きっと美しい教育の花が咲き、ゆたかな研究のみのりを、収穫し得るという希望の実現を共々に慶びあい得る時機が到来するであろう。みんなで、その^{とき}機を待とう。希望と^{たの}楽しみをもち続けて。

本号は諸事貧しいうちに築きあげた業績集である。築きあげるまでの辛勞には、みなみならぬものが多々あったであろうと思う。それだけに著者のめいめいにとっては、本号の発刊をみて一層の感懷が湧き出ずることであろう。そして感懷の流れの上には研究心と愛学心を満載した舟が、静かに帆を^{こいねが}あげることが希っている。

^{こいねが}希うことはほかにもある。まず京都府当局に対する感謝の発心を本大学人に希うのである。また本号所載の業績を多くの学界人がわかってくれれば、著者のめいめいは本望であり、且つ嬉しく思うことであろう。本学としても全く同じである。

だが、学界人が本号の業績をわかってくれなくとも、気にしないだけの心境に到達することを^{こいねが}希うのである。これはなかなかのことである。だが、本大学人のみんなが、こういう心境になり得れば、本学は極めて明るくなるであろう。

昭和34年11月28日

京都府立大学長 近 藤 金 助